平成29年度 佐賀市立金立小学校 学校評価結果

資料２

3 目標・評価

(1)自分を大切にし、人を大切にする心の育成

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	○心の教育	豊かな心、思いやりの心の育成	○人権教育の計画的な取組を行う。 ○道徳の時間の充実を図る。 ○児童の読書量を増やす。	・毎月第3水曜日に行う人権集会を行う。また，様々な集団の中で，友達の良さに気づかせる場作りを行う。 ・週に1時間の道徳の時間の充実を図る。 ・学校全体で道徳の別葉を作り，実施する。 ・授業参観で「ふれあい道徳」の授業を行い，保護者への啓発を図る。 ・各学年貸出目標値（低学年120冊，中学年100冊，低学年80冊）を全児童90%達成を図る。 ・「きらきら」30選を達成した児童には、賞状を与え賞賛する。 ・図書館祭りや国語の授業での読書紹介を通して，読書への興味を深めさせる。読書で豊かな心と語彙力を培うために，朝読書の充実を図る。	A	・定期的に人権について考える時間を持つことで、友達のよさや命の大切さについて考えるよい機会となった。よりよい学級づくりにもつながった。 ・今年度は人権擁護委員による人権教室を学年ごとに行った。学年の実態に応じた内容の人権教室を実施することができた。 ・ふれあいコンサート時のように、専門的な講師（平成29年度はシャナさん）を呼ぶことで、より身近な問題として真剣に向き合うことができた。 ・年間貸し出し数は1人平均147冊だった。各学年の目標値を超えた。必読図書の紹介を充実させていきたい。 ・図書館祭りでの図書紹介、先生や委員会からの図書紹介など紹介活動は当初の計画通り行った。	・外部からの講師を招く時には、人権教室の内容について等、十分な打ち合わせが必要である。授業学習内容としてのイメージに「ずれ」等が生じないように、担任との協力体制を築いて講師との連携を密に取り合う必要がある。 ・図書紹介の機会を昼の放送などを利用していきたい。
教育活動	●いじめ問題への対応	人権尊重の教育の充実	○「心のアンケート」を行い，家庭と学校との連携を密にし，いじめの未然防止及び早期発見・早期解決に努める。 ○「学校評価アンケート」を通して，「学校が楽しい」と答える児童100%にする。 ○スクールカウンセラーと連携を取り合い，子どもに寄り添う教育相談を実施する。	・グループ学年を中心に複数の教員で児童に関わる。いじめにつながる言動の早期発見，早期対応に努める。 ・「いじめ0のやくそく」を校内に掲示し，放送により呼びかけていく。 ・いじめアンケートを定期的に実施する。 ・毎月15日に「心のアンケート」を実施し，気になる児童について情報を把握し，解決を図る。 ・QUアンケートの実施・分析を行い，学級経営に生かす。 ・いじめをしない，いじめを許さない児童を育てると共に，支持的風土のある学級作りをする。	A	・児童の実態やアンケート等からの情報を踏まえて、ケース会議を開催していったことで、いじめの実態把握及び早期発見、事案対処に努めることができた。 ・毎月実施の「心のカード」を分析した後，各担任が配慮すべき児童に対応しており，児童の心の安定につなげることができた。また，QUアンケートを実施・分析することで，学級経営全体と児童の実態等を見つめ直して，改善策を考えることができた。学年グループ単位で共通する指導の具体策を考えることができた。 ・スクールカウンセラーと学級担任が組んで，授業（スクイグル）を行った。（4，6年） ・生徒指導協議会や特別支援研修会などでの話し合いを定期的に行い、担任のみならず、学年グループ、生活指導員などと連携しながら、児童に関わり、日頃の様子や気持ちの変化に目を向けていくことができた。 ・毎学期の始めに「いじめ0の約束」を全校児童で確認し、いじめのない学校を作っていこうとする機運を高めることができた。 ・年間1回（7月）に児童・保護者双方に、また、毎月1回児童へのいじめについてのアンケート調査を実施し、いじめの実態の調査、早期発見、事案対処に努めた。	・毎月の「心のカード」やQUアンケートについては，今後も実施を継続していく。児童の気持ちの小さな変化にも常に目を向けることができるようにしていく。 ・生徒指導協議会、特別支援研修会などでの定期的な話し合いを継続し、情報交換を密に行いながら、教職員全体で、児童に関わりながら様子を把握し、いじめの早期発見や事案対処をすることができる体制を維持していく。 ・毎学期始めに「いじめ0の約束」を全校児童で確認することに加えて、毎月始めの「いじめ・命を考える日」に更に重きを置き、各学級での話し合い・講話を設ける。 ・前年度と同様のアンケートを実施し、いじめの実態についての調査の継続、早期発見、事案対処に努めていく。 ・授業において、スクールカウンセラーと学級担任が共に取り組む指導体制は今後も続けていく。
学校運営	○児童の主体性の育成	教員の専門性と意識の向上	○学校行事等で児童の「出番」「役割」「承認」を行う。 ○児童会活動の中で，児童の自主的な活動を支援する体制を整える。	・一人一人に役割を持たせ，「承認・称賛」する場を多く設定する。授業参観等で保護者に、児童一人一人の頑張りを称賛してもらうカードを書いてもらう。 ・「にじいろさん」の発見と賞賛（校内放送を利用）を行う。 ・地域の大人とのふれあい活動によりふるさとに愛着を持たせ，地域に関わろうとする態度を育て，市民性を育む。	A	・昼の放送の「にじいろコーナー」で児童の良さや頑張りを具体的に紹介することで、その行動や態度をまねしようとする児童が増えた。 ・学期に1回、大きな行事の時に保護者に「承認カード」への協力を依頼し掲示することで、児童の意欲付けにつながった。 ・縦割り活動では、リーダーを中心に無言掃除に取り組んだり、遊びの内容を計画して仲良く遊んだりする姿が見られた。また，縦割り活動に対する教職員の称賛が児童の意欲につながった。 ・5・6年生はふれあい運動会やふれあい文化祭の企画・運営を担い、地域の人とかかわりながら役割を果たすことができた。	・「にじいろコーナー」では、できる限りたくさんの児童の良さや頑張りを紹介できるように、全職員で見ていく。 ・「承認カード」の横にその行事の写真を貼る場合は、目が行き届く場所に掲示するようにする。 ・今後も縦割り活動を継続していき，称賛を繰り返すことで，金立小のよき伝統として受け継いでいくことを目指す。 ・運動会や文化祭の企画・運営は5・6年生が行うが，学校全体で分担するなどして職員間で分担したりするなどしてサポート体制を整える。

(2)学力の向上

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力の向上	理解力、思考力、表現力の充実 授業力の向上 家庭学習の定着	○学力調査等で全国（県・市）平均以上を達成する。 ○校内研究を中心とし，わかる授業づくり・考えさせる授業づくりを行う。 ○家庭学習の習慣を身につけさせ，日々の学習内容を習熟させる。	・計算タイムを計画・実施し，一年間継続して取り組む。 ・算数の学力向上を図るために，課題別，習熟度別の授業に取り組ませ，個に応じた授業を実施する。 ・「金立小評価規準」を明確に持ち，「伝え合い深める」活動を充実させた問題解決型の学習を導入する。児童一人一人が書く力をつけることを目指す。 ・全職員による研究授業及び授業研究会を通して，授業力向上を図る。TT少人数指導を算数科で実施し，個に応じた指導を充実させる。 ・雄飛学園メソッドの活用，学期1回毎の「学びの強化週間」の取組で，家庭と連携しながら家庭学習習慣の定着を図る。また，自学については，例を示しながら質を高めていき，よくできたものを掲示して児童に広める。	A	・計算タイムは，月・木曜日に計画通り実施することが出来，計算技能が向上したが，低位の児童の理解を促進するために，1回をスキルタイムに変えていく必要性を感じる。 ・課題別・習熟度別学習は，4学年は導入できたが，高学年では導入することが出来なかった。来年度は，4学年以上は必ず実施していきたい。 ・12月の学習状況調査では，どの学年もほとんどの教科において，県平均を上回ることが出来，基礎学力が向上してきた。来年度に向けては，全ての教科及び全ての領域で県平均を上回ることが当面の課題である。 ・基本的学習習慣がほぼ確立し，どの学年においても問題解決型の学習の系統性をもつことができるようになってきた。また，全職員による授業研究会も実施し，教師の授業力もかなり向上した。 ・「学びの強化週間」を設定し，自主学習の手本を示してきたことで児童のやる気を喚起することができ，家庭での学習習慣がずいぶん確立してきた。	・週2回の計算タイムの1回を「スキルタイム」に変え，算数科における理解力及び数学的思考力向上に努めたい。 ・指導方法改善による「習熟度別学習」を担当学年全部に導入していき，全児童の理解力向上を目指す。 ・12月の学習状況調査の結果を踏まえ，児童のつまずきの原因を入念に策定し，苦手な分野の指導を強化するとともに，過去問題の傾向を見据えた入念な指導を実践していく。また，B問題の答え方のマニュアルを示し，習熟の時間等で実践していく。 ・基本的学習習慣を確立し，どの学年も問題解決型の学習をできるだけ多くの機会で導入し，基礎学力向上につなげていく。また，全職員授業を展開し，指導者一丸となって基礎学力向上を意識しながら日々の授業研究に取り組んでいく。 ・自主学習の内容も基礎学力向上を意識したものになるよう指導していき，自主学習をさらに励行する。
教育活動	●教育の質の向上に向けたICT利活用教育の実施	ICTを利活用し、学力向上につなげる	○全職員が電子黒板活用した授業を毎日1回以上実施する。 ○教室の黒板と電子黒板とを有効に活用する。	・ICT利活用のため，自作教材の共有化や授業での効果的な活用法についての校内研修を行う。 ・自作教材の共有フォルダを設定する。 ・授業での効果的なICT利活用について校内研修を行う。	B	・各学級で、電子黒板の活用がはかられ、日頃の授業で積極的に活用されていた。 ・タブレット型パソコンを使ったローマ字入力の練習の授業の中でSEI-Netの活用法など授業を通して行うことができた。 ・特別に、校内研修の時間を取ることができず、資料による説明しかできなかった。 ・情報モラル教育の講演会を開き、ネットトラブルなどに対して、児童に呼びかけることができた。	・ICT支援員と連携を図り、放課後に簡単な講習会を開きながら、具体的な活用法を検討する。 ・授業での効果的なICT利活用について、講習会を行う等の校内研修を行う。 ・情報モラル教育を計画的に実施できるように、教材などの整備を行う。 ・次期導入が予定されているプログラミング学習についての職員研修の場を定期的の設け、指導の充実を図る。

(3)体力の向上

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体づくり	望ましい食習慣と自己管理能力の育成	○計画的な食教育・健康教育を実施し，朝食摂取率95%を目指す。 ○体を動かすことを楽しむ機会を設ける。 ○スポーツテストにおいて，全児童の運動能力の向上をめざす。	・学級通信や給食便りで，朝食の必要性を啓発する。 ・全学級において食育や健康に関する授業を養護教諭や栄養職員や歯科校医等と共に行う。 ・「さわやかタイム(縦割り活動)」を実施し，戸外での運動を推奨する。 ・全職員でスポーツテストの結果を共通理解し，授業に生かす。 ・「スポーツチャレンジ」に取り組む。	B	・全学級において食育や健康に関する授業を行うことができた。 ・給食週間に合わせて，学級通信や給食便りで朝食の必要性などを啓発することで食に関する意識が高まった。また，朝食摂取率100%の学年も見られるようになったが，いまだ個人差が見られる。 ・さわやかタイムでの戸外遊びに加え，スポーツフェスタやスポーツチャレンジなど運動に親しむ機会を設けたことで，運動に親しむ機会を設けることができた。 ・スポーツテストの結果を年度当初に職員間で共通理解し，体力向上を目指したが，今年度のスポーツテストでは，ほぼ全学年において佐賀市や佐賀県の平均値を下回っていた。	・学校医の先生に専門的な話を児童や教師にしていただき，健康に関する意識を高める。 ・給食週間に合わせた食育の推進を継続し，朝食摂取率の向上と摂取率100%の定着を目指す。 ・外遊びが減ってきている現状を踏まえて、外遊びへの症例を含めての呼びかけを積極的に行う。 ・さわやかタイムやスポーツフェスタなどの継続に加え，佐賀スポーツチャレンジなどの記録を紹介したり，貸し出し用の運動用具を整備したりすることで運動への意欲を向上させ，運動習慣の定着を図る。また，スポーツ委員主催の外遊び週間を設定するなどして，児童による外遊びの啓発を行うことで，体力向上を図りたい。 ・運動能力スポーツテストについて、測定の仕方等への共通理解を図るために、職員間での実技講習会を実施する。

(4)規範意識・判断力の育成

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	○基本的生活習慣の定着	規範意識・判断力の育成	○重点目標「あ・し・た」について共通理解を図り，指導を徹底する。 あ…「あいさつを気持ちよくしよう。」 し…「静かにろうかを歩こう。」 た…「正しい言葉づかいをしよう。」 ○「金立スタンダード」の確立を図る。 ○環境ISOの取組を行う。	・生徒指導主任及びグループ学年をベースにした，チームによる生徒指導体制を作る。 ・毎月末の生徒指導協議会で児童の様子を確認し合い，協議の内容を学級担任が確実に児童の指導に生かす。 ・「雄飛学園メソッド」に示された内容について，具体的な例を提示しながら保護者に伝え，啓発を図る。 ・「まなざしカード」を活用し，保護者と連携（個別の対応によるつながり）して基本的生活習慣の定着を徹底する。 ・「金立スタンダード」の確立のため，特別活動を通して定着させる。 ・環境ISOの取組を通して，環境への意識化や資源の有効化について考えさせる。	A	・生活指導主任や学年グループを中心に、日々の児童への声掛けを行い、年間生活目標「あ・し・た」について、担任個人の対応ではなく、職員の協力体制の下での指導を行っていくことができた。 ・毎月の生徒指導協議会の中で、児童の様子についての話し合いを行い、協議内容について確実に指導をしていき基本的生活習慣の定着を図っていくことができた。 ・「雄飛学園メソッド」の内容を「育ち部通信」の中で、保護者に伝え、児童の様子を知らせると共に、保護者からのコメントを確認し、指導に生かしていくことができた。 ・金立スタンダードについて児童会を中心に評価・称賛を行い、その意識を高め、定着を図っていくことができた。 ・環境ISOの実行目標（児童用・職員用）を具体的に提示し、チェックシートを活用することで身近な活動として意識することができた。 ・アルミ缶回収の収益金を利用して品物を贈呈することで目に見える形となり活動意欲につながった。	・生活目標について定着を図り、更なる充実を図るために内容の改善を行うと共に、職員の協力体制を維持し、今後も指導の徹底と充実を図っていく。チャックシートの活用についても取り扱う。 ・生徒指導協議会の中で、児童の様子、学校の決まり、危険の防止などについての共通理解を行い、児童への指導の充実及び徹底を図っていく。 ・年間3回の「育ち部通信」の保護者コメントを児童に紹介したり、職員で共通理解したりしながら、有効に活用していく。 ・今後も金立スタンダードについて児童会を中心に評価・称賛を行っていくことで、意識を高めていくことができるようにする。 ・引き続き5つの目標を宣言し、今までの活動を振り返り改善しながら定着を図るとともに、校内だけではなく家庭・地域へと広げる活動を目指していくものとする。また、質的向上が図れるように、新たな目標を設定して、ベースアップに全職員で取り組む。
教育活動	○学習環境の改善充実	基本的な生活習慣・学習習慣の確立	○学習習慣4箇条 「あいさつをする」 「授業時間と休み時間のけじめをつける」 「しっかりと聞き，言葉できちんと伝える」 「宿題をきちんとする」 の徹底を図る。	・朝の挨拶運動を学年毎に行う。 ・道徳や学活の時間に，基本的生活習慣・学習習慣の定着を図る内容を設ける。 ・基本話形を教室内に常掲して，話し方を意識させる。	B	・「まなざしカード」を学期の始めに取り扱い、1週間の家庭学習時間を記録させることで、家庭学習への意識が高まり、低・中・高学年がそれぞれの目標時間に達するように家庭学習ができるようになってきている。 ・道徳や学活の時間を通して、教室内での過ごし方、廊下の歩き方などを指導した結果、廊下歩行などは右側通行する児童が増え、成果が見られた。 ・話し始めの話型を知らせることで、発表への抵抗が軽減された。（低学年）	・まなざしカードの1週間だけでは、家庭学習時間を十分に確保できているか十分とは言えない。100%には届かない状況である。連絡帳の記入などを通して、日常的に家庭学習への意識を高めていく必要がある。まなざしカードの取組は保護者にも良く受け入れられている。 ・机の整理整頓など、道徳の授業等で整理する良さを考えさせることで、基本的生活習慣や学習習慣を身につけさせたい。

(5)個別の支援を要する児童への支援

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策
学校運営	○特別支援教育の充実	一人一人の児童を大切にする声かけや指導・支援の充実 職員の研修の充実	○特別支援教育に関する研修会を行う。 ○ケース会議等を充実させ，支援体制の強化を図る。 ○金立特別支援学校との交流活動を行う。	・特別支援教育の研修を行い，専門性が向上したと感じる教員の割合を90%以上にする。 ・年間5回以上研修会を行い，教員の専門的知識を深める。 ・毎月定期のケース会議等を開き，すべての教員が対応できる環境を整える。不定期なケース会議等に対しても迅速に対応する。 ・各学年，特別支援学校と年1回ずつの交流を成功させるため，児童中心の綿密な計画作りを行い，実施する。	A	・雄飛学園教育研修会で、ユニバーサルデザイン教育の実践報告会を行い、参考にできるものを互いに取り入れることを確認することができた。 ・講師を招いて合理的配慮についての研修会を行い、専門的な知識を深めることができた。 ・ケース会議等については、定期ではなく、必要に応じて開き、対策案を練ったり、共通理解を図ったりした。 ・個別の支援が必要な児童への支援についてはしっかりと取り組んでいる。 ・特別支援学校との交流活動では、交流する2～3週間前にビデオレターや手紙のやりとりをしたことと今までの蓄積もあり、子どもたちは積極的に関わりを持って行動することができた。学年によっては、年賀状等での交流も行った。	・合理的配慮については、今後も情報交換を密に行っていく。 ・交流する前にビデオレターや手紙のやりとりは効果的であったので、次年度も継続的に実施する。

(6)幼保小中連携の取組

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策
学校運営	○幼保小中連携	雄飛学園教育構想による金泉校区の教育推進	○幼保小中連携協議会や雄飛学園教育研究会において，職員の交流や連携を図る。 ○幼保小，小小，小中連携活動の中で，確実に児童に出番・役割を与え，表現する機会や場を設け，承認・称賛する。	・情報交換を行う。（幼保小連携協議会　年間3回） ・雄飛学園構想（「めざす15歳の姿」）における職員の合同会議・合同研修会を年間10回以上行い，雄飛学園教育の取組を3校合同で推進する。 ・小中連携の雄飛学園教育や金泉中に入学する仲間意識を高める小小連携交流活動を実施する。 ・長期休業中や参観日等，職員の参観・体験活動を計画的に実施する。 ・児童の交流活動を推進し，「出番・役割」の中に必ず表現の場を設け，自信を持たせる。	B	・中学校区内3校で組織する雄飛学園教育において、各専門部が中心となり小中連携、小小連携ができている。児童同士の交流や中学生との交流、幼稚園との交流は計画的になされいるが、職員同士の交流（授業研究会参加を通しての系統的な学力向上）については、実践が不十分であった。意義について再考が必要である。 ・夏期休業中には、町内幼稚園に保育参観に全職員が出向き、保育の様子を観察したり、保育士との情報交換をしたりして、良き連携ができている。	・雄飛学園教育における授業研究会をしっかりと検討していく。研究会では雄飛学園の共通視点をもとに実態を踏まえての話し合いをする。 ・雄飛学園教育の取組をさらにより良くしていくために，見通しを持って会議等を行うとともに，会議内容の質を高めていく。 ・幼保園児にとって，小学生に早く入学してみたいというような交流会を計画・実施をする。 ・小小連携では，5年生の自然教室での交流の中身を見直し，合同で活動できるプログラムを計画・実施し，より深まりのある交流にする。また，6年生の修学旅行においても実のある交流活動を計画する。 ・中学説明会で部活動の体験はできたが，次年度は，中学校の教員による出前授業が実現できるように考えていく。

(7)本年度の重点項目に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策
学校運営	○開かれた学校と地域連携の推進	地域の親しみ、地域を知る児童の育成 地域及び保護者へ向けての学校公開と学校情報の発信	○学校ホームページ，学校だより・学級だよりでの学校情報の広報を積極的に行う。 ○保護者との密な情報共有を行う。 ○地域団体，施設との交流を推進する。 ○地域ボランティアの活用を推進する。	・学校便りの地域回覧，学校ホームページの定期的な更新を行う。 ・月2回以上の学級通信，月1回以上の教育相談・図書館・給食便り，学期に1回以上のTT少人数便りを発行する。 ・総合的な学習の時間において，地域と連携した活動に取り組む。 ・地域ボランティアの活用，地域団体との交流を行う。	A	・地域とのふれあいを通して共に活性化することを目的とした「ふれあい運動会」や「ふれあい文化祭」は種目やプログラム、役割が明確化し地域との協力体制がとられ、地域や保護者からの評判も良好である。 ・生活科や総合的な学習の時間等において、全学年で地域と連携した活動が行われた。「読み語り」「クラブ活動」「水曜昔遊び」「金立探検隊」「花苗植え」等、地域と一緒に活動できた。 ・「ありがとう集会」では、地域の方々を招待し、日頃の感謝を伝えることができた。児童はは地域の方々からの多くの支えがあることを知ることができた。 ・校長が発行する「学校だより」やHP更新を行うことで、学校行事や児童の活動の様子を発信することができた。	・「ふれあい運動会」において、6年生児童（実行委員）が公民館の話し合いの場に出向く等、地域と学校との話合いは行ってはいるが、その意味する重要性を共に確認させていく必要がある。また、定期的な情報交換の機会を今後も作っていく必要がある。 ・行事設定時間や学校が取り組む特設の時間では，地域の方との交流が進んでいる。しかし，普段の授業ではまだ地域の方との交流，地域の人材の活用が十分にできていない。「金立町元気アップ応援団（人・もの・ことバンク）」の周知を周囲に行い，地域の方から学ぶ機会を増やしていきたい。 ・学校通信、学級通信は定期的に保護者や地域に発行している。また、学校ホームページの充実も図ることができてきている。情報提供の意味でも、ホームページの活用等を地域創生に活かしいくように、PTA総会等でも紹介の場を設ける。

4 本年度のまとめ ・ 次年度の取組

・本校では校務分掌組織として「3部会」制を導入して、各部会毎にプロジェクトとしての企画運営を推進している。今後も教育実践上の課題を改善して成果につなげていくよう取り組んでいく。学校や児童の実態をアンケート等を通して確実に把握して、実態に即した教育実践とすると共に「不易と流行」を大切にし、日々の教育実践に全職員で前向きに取り組む。
・雄飛学園教育（近接小中学校3校合同）を展開していく上で、年間を通して児童には「出番」「役割」を設定し、日々の授業や行事等での頑張りを「承認」「称賛」する「開発的な関わり」によって、児童の自己肯定感をより良く高めていくことができた。雄飛学園教育の推進・実践により、「育ち」と「学び」の連続性の実践を図りながら、3校合同による小中連携教育について計画的、系統的な教育活動を展開、実践することができた。今後は、小学校と中学校での成長過程の違い、学習教科体系を把握した上で実状を出し合い、よりよき教育実践に努めていく。また、ふるさと金立町及び金立小学校にさらなる愛着（郷土愛）を児童に抱かせていく取組を推進していく。
・地域との関わりを深めていくために、「開かれた学校づくり」の充実を図り、保護者や地域の方の意見や思いをより多く取り入れる。様々な「アンケート」（学校関係者評価等）や「フリー参観デー」の感想等を全職員でつかみ、共通理解を図っていく。さらに、学校としての取組やその主旨等を明確に家庭や地域に発信していく。
・いじめ「0」を目指して、学級内の人間関係づくりにおいて日頃からの信頼関係の構築に力を注ぎ、学級・学年の状況やつながりをより豊かなものにしていくことができた。今後もあらゆる教育活動を通して、全教職員の共通理解の下で、「いじめ」の早期発見・事案対処に万全を尽くす。そして、誠意ある未然防止、事案対処に努める。
・校内研究で推進している「伝え合い深める」活動を基盤にした学習習慣の定着と学力向上について成果が出てきている。児童には「学んだこと」「考えたこと」を確実に伝えさせ、発信させていく上で言語活動能力の育成にも力を注いでいく。また、児童の考えに「揺さぶり」を与えるだけの教師の「語り・問いかけ」を的確なものにする研修を多く取り入れる。全児童の基礎学力向上のためのスキルを毎日の学習に取り入れる。
・健康に対する意識を高めさせていく上で学校医等との関わりを深く保ち、健康的な心身の育成の徹底を図る。また、児童に合った体育・スポーツ活動の推進を通して、日々の機会の設定や運動能力の基本的な底上げを図る。
・ICT機器の利活用を通して、授業や学習における先進的な教育実践に努めていくために、教師間での自校研修会をより多く取り入れる。電子黒板を活用して、一定の成果も出てきている。今後は、電子黒板と黒板との効果的な併用について研修していく必要がある。また、次期導入が予定されているプログラミング学習等についての研修を深めていく。

●は共通評価項目、○は独自評価項目